

＜文学と思想＞をめぐる世界文学を創造する

ーディアスポラ、トランスエスニシティ、言語葛藤国際シンポジウム（報告書）

12月13日（土）午後1時～5時

明治大学駿河台キャンパス リバティ・タワー 1086 教室（8階）

基調講演 午後1時～2時10分

講師：クリスティーネ・イワノヴィッチ教授（ウィーン大学）「ディアスポラから出て：翻訳を通して世界文学を創造する」
Out of the Diaspora: Creating the World Literature through Translation

シンポジウム 午後2時20分～5時

講師：合田正人教授（明治大学）「デリダと言語の不安」

講師：リディア・ミッシュクルニク講師（ウィーン造形芸術大）

講師：レオポルド・フェダーマイアー教授（広島大学）

講師（司会）：越川芳明

ディスカサント：土屋勝彦教授（名古屋市立大学）

（発表は、原則的に英語中心で、日本語を補助にしておこないます。ドイツ語もまじるかもしれませんが、その場合は、日本語の翻訳をつけます）

シンポジウムの趣旨

近代の国民国家の形成と共に育まれてきた「国民文学」の枠組みが崩れてきている。そのことは、国民国家を単位としない、より大きな経済的グローバリゼーションの流れと共に、複数言語のあいだを横断する越境作家・詩人の誕生と活躍を見れば明らかである。この国際シンポジウムでは、日本語圏、ドイツ語圏を含む、世界各地で誕生しつつある「世界文学」を取りあげ、それらにどのような共通の特徴が見られるのか、ディアスポラ（離散）、トランスエスニシティ、言語葛藤の観点から考察する。そうすることによって、狭隘なナショナリズムと結び易い「国民文学」の特異性ではなく、「世界文学」の普遍性を導き出す。

今回のシンポジウムの趣旨は、世界文学をディアスポラ、トランスエスニシティ、言語葛藤の諸相から考察しようとするものである。ドイツ語圏越境文学の視座から見ると、こうした思潮は、とくに 21 世紀以降のドイツ現代文学の大きな一角を占めつつ、いわゆる「ドイツ国民文学」の規範性を揺るがす起爆力ともなり、ドイツ的アイデンティティを多重化ないし流動化する新たな文学創造力にもなっている。クレオール文学の持つハイブリディティにまでは到達していないにしても、異文化性や他者性がもたらす言語・文化的衝撃は高く評価できる。また世界文学を構想するに際して、「翻訳」の諸問題は不可避の重要なモメントである。その意味で今回のシンポジウムは、まさに時機を得た問題設定と広い展望を開く企画であった。

イヴァノヴィチ氏の基調講演は、ダンテとナボコフ、それに多和田葉子を例にして、亡命や翻訳が世界文学において果たしてきた役割とその意義について語ったもので、非常に啓発的で説得力を持つものであった。翻訳の問題として取り上げられたのは、ポーランド出身の英語作家 Eva Hoffman の作品 *Lost in Translation* とソフィア・コッポラ監督の同名映画 *Lost in Translation* であるが、いずれも二つの言語・文化に引き裂かれた人間のアイデンティティ希求と翻訳の問題を主題化しており、そこでは自らの表現手段を失う危機とそれを乗り越え、新たな言語世界に向かう人間の変容力と創造力が問題となっている。世界文学における翻訳の問題としては、たとえば、イタリア中世文学の代表たるダンテの『神曲』とボッカッチョの『デカメロン』がラテン文学の翻訳から生まれたように、20 世紀のナボコフの露英語作家ナボコフが『ロリータ』（1955 年）を英語で執筆した背景として、プーシキンの韻文小説『エヴゲーニイ・オネーギン』（1830 年代）を自身が英語に翻訳したことが重要であるとし、いわばそのサブテキストとして位置付けている。確かに文学的な引用と言葉遊びにあふれる晦渋な文体を持つ作品『ロリータ』が生まれた背景として、翻訳行為を通して培った言葉の変容力とメタファー的な創造力があつたように思われる。そして多和田葉子の場合は、さらに複数言語・文化の間にある翻訳の意識が先鋭化されており、そこに世界文学が共通に持ちうる問題意識が現代化される例ととらえることができるだろう。多和田は、日本語とドイツ語の両方で創作するなかで、その両言語に相互干渉されることにより新たな表現の可能性とことばの奥行きを探っている作家といえるだろう。

合田氏の発表では、デリダのエクリチュール論をハイデガーの「形而上学」批判から読み解き、文学言語への示唆を得る手がかりとなった。存在が非存在との差異によって存在

させられるゆえに、非存在的な存在を措定して、それを「超越論的なシニフィエ」とデリダは名付けるが、それは遡及への志向を孕みつつ遡及しえないものと一応定義できるとする。ここから連想できるのは、ベンヤミンの痕跡論かもしれない。歴史的な廃墟は、消去されていても痕跡として残っているものを後から部分的に解読することができるからである。そこにエクリチュールが背後でパロールを支えている構造を感受できるように思えると同時に、「言語は存在しない」という挑発的なテーゼを理解する鍵にもなるのでないだろうか。ハイデガー的な「沈黙の声」（私の理解では言語体系から生まれるパロールの様態）をこの超越論的シニフィエに投影して考え、デリダがそれを要請しながら排除するというプロセスによって内的体系としての「言語」が表象可能になるのだろう。ここに、おそらくソシュールの記号学をデリダがグラマトロジーに置き換えていったプロセスが関わっているように思われ、「言語の不安」すなわち、言語表現の不可能性（と可能性）についても深い示唆を得ることができた。また中井久夫のいう「圧倒的なイメージを減圧する作用がある」言語の貧弱さこそ、言語表現の限界を物語っており、だからこそ文学はその限界を乗り越えようとする試みともいえよう。

ミッシュクルニク氏の消火栓文学の話は、新鮮な知見であった。地下水を通して世界中につながっている言語の水脈、つまり神話や無意識、経験や知識、物語や歴史、個々人の経験などが溶け合っており入り込んでくる地下水脈の経路からあふれてくる創造力によって文学が生まれていくという考え方は、間文化性、間テキスト性の思想につながるのではないか。文学創造は、カテゴリーの創造ではなく、共同体的な共有する物語に個人を結びつけていくことで生ずるという。ここに特殊から普遍へ向かう文学言語の特性を伺うことができるだろう。文学創造のプロセスを作家としての経験から重ね合わせ明らかにしようとした発表であった。後半に言及されたカフカの「オドラデク」の問題から、ホロコーストを生き延びたジャン・アメリーやルート・クルーガー、そしてゼーバルトに至る作家たちの系譜は、犠牲と罪、贖罪とルサンチマンといった主題を展開しており、ディアスポラ文学の典型的な諸例ともいえよう。

フェダーマイヤー氏は、インターカルチュラルな文学の一例として、ドイツ語とロシア語で創作するドイツ在住のロシア人作家オルガ・マルティノヴァ Olga Martynowa を取り上げた。彼女は 1962 年生まれで 1990 年からドイツに移住した越境作家であるが、2012 年にバッハマン賞を受賞した。その前年にはスロヴェニア人作家 Maja Haderlap が受賞している。文学市場においてこの越境性というラベルはメリットにもなるが、当該作家たち

はそれを否定し普遍的な文学で勝負しようとする。マルティノヴァの場合、2つの文化の媒介による創作力を高めロシア語で詩作し、ドイツ語でエッセイと小説を執筆し、その夫がドイツ在住のロシア語作家で、息子はロシア語ドイツ語翻訳者である。1990年の旧ソ連からの新たなポグロムから逃れたマルティノヴァは、旧ソ連が解体した後、オスタルギー（旧東ドイツへのノスタルジー）やハプスブルク神話と同様に、失われたソ連体制への残滓（郷愁）を持ちながら批判的に対峙しており、それはまさにヨーゼフ・ロートがハプスブルク王朝に対峙した姿勢と似ている。この方向にはトルコ作家オルハン・パムクが描く故郷のメランコリーにつながっている。いずれにせよ、複数文化を体現するこうした作家は、新しい文学表現を創造する力を有し、今後も世界文学に寄与することだろう。

越川氏は、沖縄作家である目取真俊の作品を取り上げ、その沖縄方言による表現が、日本政府とそれに追随する沖縄上部官僚たちによる新植民地主義に抵抗する力となっていることを実証した。沖縄戦は本土決戦（地上戦）としてもっとも過酷な歴史を有し、多大の犠牲者を出したのみならず、戦後も一貫してアメリカ軍による本土防衛の最前線に位置づけられる場所が沖縄である。したがって沖縄の過去と現在を描く文学は当然激烈なルサンチマンとアイロニーに満ちた硬質の文体を持つことになる。戦争の集合的な記憶に対して個別経験の深化によって亀裂を与える目取真の文学的感性は、たんなる反戦文学としての政治性にとどまらず、抒情性をたたえた比喻表現や神話的な幻想性を含む優れた文学的結晶といわれる。南米文学のマジックリアリズムのような神話性と土着性との融合を結晶化した諸作品には、そのオムニフォンの詩想によって、確かに世界文学への飛翔を見ることができるようと思われる。

以上、覚束ない記憶を頼りにシンポジウムを振り返ってみたが、重大な思い違いや誤解なども多々あるかと思う。この場を借りて発表者の方々に改めて謝意を述べるとともに、無理解についてはご寛恕くださるようお願い申し上げます。また本シンポジウムの企画・実施に対して、とくに越川氏のご尽力に感謝申し上げたい。

以上